

【32】の御経文 流通分

読み方 (注釈版聖典 128頁 からの引用)

舍利弗 如我今者 称讚諸仏不可思議功德

舍利弗、われいま諸仏の不可思議の功德を称讚するが如く、

彼諸仏等

かの諸仏等も

亦称説我 不可思議功德 而作是言。

またわが不可思議の功德を称説してこの言をなしたまはく、

釈迦牟尼仏 能為甚難 希有之事

へ釈迦牟尼仏、よく甚難希有の事をなして、

能於娑婆国土 五濁悪世 劫濁 見濁 煩惱濁

よく娑婆国土の五濁悪世、劫濁・見濁・煩惱濁・

衆生濁 命濁中 得阿耨多羅三藐三菩提

衆生濁・命濁のなかにおいて、阿耨多羅三藐三菩提を得て、

為諸衆生

もろもろの衆生のために、

説是一切世間難信之法。

この一切世間難信の法を説きたまふと。

ことばの説明

釈迦牟尼仏(しゃかむにぶつ)

お釈迦様のことです。

娑婆(しゃば)

この世のことです。インドの言葉のサハーを漢字にあてたものです。サハーとは耐え忍ぶことを意味します。

五濁悪世(ごじよくあくせ)

五つの悪いことがおきる世の中。以下に五濁について岩波仏教辞典から引用します。

劫濁(こうじよく)

時代の汚れ。見濁・煩惱濁・衆生濁・寿命濁の四つの濁りがある時代のこと。

見濁(けんじよく)

人々が誤った思想・見解を持つようになること。

煩惱濁(ぼんのうじよく)

煩惱が盛んになること。

衆生濁（しゅじょうじよく）

見濁・煩惱濁の結果として心身が弱く、苦しみが多くなること。

命濁（みょうじよく）

寿命が次第に短くなり、最低十歳にまでなること。

阿耨多羅三藐三菩提（あのかたらさんみやくさんぼだい）

最高の悟りのことです。

一切世間難信之法（いっさいせけんなんしんしほう）

信じることが難しい御法義という意味です。

大意

舍利弗よ、私が仏様方の不可思議な功德を賞賛するのと同じく、  
仏様方も私（お釈迦様）の不可思議な功德を賞賛する。

「お釈迦様よ、この五濁悪世の世において、  
最高の悟りを得て、  
あらゆる衆生のために  
信じることが難しい御法義を説かれるという  
世にも困難なことを成し遂げられた。」

内容と味わい

お釈迦様がこの五濁悪世に生まれられて、御修行の末に悟りを  
ひらかれ、他力念仏の御法義を説き広められたことを諸仏方が賞

讃されます。

ここの一節で大切なのは「信ずることが難しい法」というお言葉  
であります。信ずることが難しい御とは、『阿弥陀経』に説か  
れてある他力念仏の御法義のことです。

あらゆる衆生をわけへだてなく救うはずの他力念仏の御法義  
が、なぜ信ずることが難しいのでしょうか。御法義の理屈が難し  
いからではありません。きわめて簡単なのであります。きわめて  
簡単であるからこそ逆に信じられぬのです。

他力念仏の御法義は、ただ疑いなく阿弥陀様のおおせをお聞き  
するだけなのです。この疑いなく聞くということが難しいのです。  
自分中心の考えにとらわれている私共は、自分自身の力をたのむ  
ことからはなれられません。

「一生懸命聞法したから」「何回もお念仏したから」「心を込め  
てお念仏したから」「善い行いをしたからお浄土まちがいがない」  
すべて自分自身の力にとらわれたすがたであります。

逆に「私のようなものはお念仏では往生できない」と考えるの  
も、阿弥陀様の力より自らの煩惱を上に見ていることになり、同  
様に自力にとらわれたすがたであります。

お釈迦様が他力念仏の法をお説きになることは甚だ難しい理  
由は、私共の自力への執着があまりに強いからであります。

### 【33】の御経文 流通分

読み方 (注釈版聖典 128頁 からの引用)

舍利弗 当知

舍利弗まさに知るべし、

我於五濁悪世 行此難事

われ五濁悪世においてこの難事を行じて、

得阿耨多羅三藐三菩提

阿耨多羅三藐三菩提を得て、

為一切世間 説此難信之法。

一切世間のために、この難信の法を説く。

是為甚難。

これを甚難とす」と。

#### ことばの説明

#### 難事(なんじ)

この五濁悪世の娑婆において、修行し悟りを得て、一切衆生に他力念仏の御法義を説かれたこと。

#### 難信之法(なんしんしほう)

前回説明いたしました、他力念仏の御法義であります。

#### 大意

舍利弗よ、よく知りなさい。私(お釈迦様)は、五濁悪世において困難なことを成し遂げて最高の悟りを得たのである。

そして、世のために、他力念仏という信ずることが難しい御法義を説いているのである。

これこそ最も困難なことである。

#### 内容と味わい

内容は前回、仏様が説かれたと同じ内容を、お釈迦様が自ら説かれるのであります。私共が信ずることが難しい他力念仏の御法義を、私共に説くことははなはだ難しいことであるとおっしゃるのであります。

前回の仏様のご指摘に引き続き、お釈迦様も仰せであります、自力にとらわれる私共が、他力念仏の御法義を受け入れること、いかに困難であるかを諸仏もお釈迦様も説かれるのです。

# 【34】の御経文 流通分

読み方 (注釈版聖典 128頁 からの引用)

仏説此経已

仏、この経を説きたまふこと已りて、

舍利弗 及諸比丘 一切世間天人阿修羅等

舍利弗及び諸の比丘、一切世間の天・人・阿修羅等、

聞仏所説

仏の所説を聞きたてまつりて、

歡喜信受 作礼而去。

歡喜し信受して、礼をなして去りにき。

ことばの語句説明

比丘(びく)

出家者

天(てん)

三善趣の一つ。天界。

人(にん)

三善趣の一つ。人界。

阿修羅(あしゅら)

三善趣の一つ。阿修羅界。

歡喜信受(かんぎしんじゅ)

歡喜とは喜ぶことです。また信受とは信じ受け入れることです。ここではお名号のおいわれをそのまま聞いたときの、他力の御信心のことを指しています。

大意

お釈迦様がこの経を説きおわたったとき、舍利弗、もろもろの出家者、天・人・阿修羅などの方々が、お釈迦様の説法を聞かれて歡喜して信受して、礼をして、去りました。

内容

お釈迦様の説法の法座に集われた方々は、『阿弥陀経』の冒頭に紹介されてきました。その方々をここでは、舍利弗、もろもろの出家者、天、人、阿修羅等とまとめられています。

説法の座におられた方々は、みなお名号のおいわれを疑いなくお聞きして、ご信心をいただいたのです。そして五体投地の礼をして去っていかれたのです。

## 第四章 『御文章』について

前回まで月参りで読誦させていただいている『阿弥陀経』のあらすじをご紹介します。今回からは同じく月参りで拝読させていただいている『御文章』の内容をご紹介します。いと存じます。

『御文章』拝読にあたって、大きく次の二点について気を付ける必要があると存じます。

一、『御文章』はお経とちがって日本語で書かれておりますので、古文ではありませんが、おおよその意味はおわかりかもしれません。しかしながら、現代語と同じことばであっても、意味が異なっている言葉がございます。ですから知らず知らずのうちに誤解されている場合もあります。

二、『御文章』には浄土真宗独自の理解をしている言葉が多く出てまいります。これらの言葉の理解の理解には十分な配慮が必要であります。でないといふ他力念仏の御法義を取り違えてしまいます。以上のことから気を付けながらすすめてまいります。

### 『御文章』を書かれた方について

『御文章』を書かれたお方を蓮如上人（れんによししょうにん）と申します。蓮如上人は親鸞聖人から数えて第八代目の本願寺の

御門主でございます。1415年から1499年の御生涯であります。

蓮如上人の御生涯のちょうど中間あたりで、応仁の乱がおきて、京都が焼野原になります。そして世の中は戦国時代へと移っていったのです。ですから蓮如上人の時代は人々の心が荒々しい時代であったのではないのでしょうか。そんな中でお念仏のみ教えを弘めるために力を尽くされたのが蓮如上人でございます。その結果、蓮如上人の時代に本願寺門徒数は急速に拡大していったのです。その後の歴史については、ここでは省略させていただきます。

ここから蓮如上人のご活動について述べてまいります。蓮如上人は、殺伐とした時代にあつて、心のよりどころをもとめる人々にお念仏のみ教えを説かれたのでありますが、そこに一工夫あつたのでございます。

### 『御文章』の配布

他力念仏のみ教えとは、実に単純なものであります。ですが今も昔も人の疑い深い心はかわらぬものです。また誰もがその御法義の内容を知ることができるような御書物はございませんでした。そこで蓮如上人は、当時の人々ならば誰でもわかるような簡明瞭な文章で、他力念仏の御法義を説き述べられたお手紙を全国の人々に配布なされたのであります。これが『御文章』であります。

『御文章』は全部で二百通以上もあります。そこでのちの世の

方が内容などを吟味した上で、八十通にまとめられたのが、今私共が拝読させていただいている『御文章』となったのであります。

### 『正信偈（しようしんげ）』の開版

当時の浄土真宗では、信者のあつまりではどのようなお経を誦していたのでしょうか。それは善導大師様の御著作である『往生礼讃（おうじょうらいさん）』であります。『往生礼讃』は現在でもおつとめされますが、美しい節のついた漢詩であります。ですが誰でもとなえられるというわけではありません。

そこで、親鸞聖人の御著作である『教行信証（きょうぎょうしんしんしょう）』の中におさめられている『正信偈』を皆でお勤めすることにされたのです。『正信偈』は、阿弥陀様のお徳と、他力念仏のみ教えを明らかにすることに功績のあつた七人の高僧方のお徳を、親鸞聖人が讃嘆された漢詩でございます。そして誰もが参加できるように、木版刷りで出版されて配布されました。このことが現在、浄土真宗のあつまりで『正信偈』がおつとめされるという習わしのはじまりであります。

### 『和讃（わさん）』の開版について

『正信偈』とおなじく木版で出版されたのが『和讃』であります。『浄土和讃（じょうどわさん）』『高僧和讃（こうそうわさん）』『正像末和讃（しょうまつわさん）』の三部からなりますのでまとめて『三帖和讃（さんてつわさん）』とも申します。

『三帖和讃』は、親鸞聖人がよまれたうたであります。短歌とは形式が異なりまして、親鸞聖人当時にはやった形式でございます。

阿弥陀様のお徳や、先に述べました七人の高僧方のお徳を讃えられたうたであります。

### 『御文章』の内容について

『御文章』とはどのようないきさつのある御書物であるかはわかりいただけたと存じます。ここから『御文章』のおおまかな内容をご説明いたします。

現在私共が拝読させていただいている『御文章』は八十通あるともうしました。それは五帖からなりたっております。全五冊といたことであります。ですから第何帖の第何通というふうに数えます。またそれぞれに内容をあらわす表題がついております。

月参りの時に拝読させていただいている御文章は、第五帖の第十通で聖人一流章と名付けられております。『御文章』の第五冊目の十番目のお手紙という意味で、その題は「聖人一流章」というのでございます。

このお手紙は元来、もつと長いものです。そのなかで浄土真宗の御法義がもつとも簡単明瞭にまとめられている部分を抜き出しましたのが、このお手紙であります。では次回から内容をご紹介します。

## 第五 章 『御文章』 拝読

まず全文をかかげてみます。

### 聖人一流章

聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもつて本とせられ候ふ。そのゆゑは、もろもろの雑行をなげすて、一心に弥陀に帰命すれば、不可思議の願力として、仏のかたより往生は治定せしめたまふ。その位を「一念発起入正定之聚」(論註・上意)とも釈し、そのうへの称名念仏は、如来わが往生を定めたまひし御恩報尽の念仏とこころうべきなり。あなかしこ、あなかしこ。(注釈版聖典 1196頁 より引用)

文章は短いのですが、句読点ごとに句切つて説明してまいります。「言葉の説明」「大意」「内容とあじわい」とつづけてまいります。

### 【35】の本文

#### 聖人一流の御勸化のおもむきは、

#### ことばの説明

#### 聖人(しようにん)

浄土真宗の御開山聖人、親鸞聖人のこととございます。

#### 一流(いちりゅう)

現代では、第一級のすぐれたという意味ですが、ここではそのような意味合いではありません。「流派」という言い方がございます。華道や茶道、また武術や芸事などでも「〇〇流」といいいます。これはその分野でのひとつの集まりであります。

当時の仏教でも同じことがいえます。お浄土に往生したいと願うおおきな集まりがあり、その集まりの中での考え方によって「〇〇流」という呼び方がありました。ですから親鸞聖人の考え方も一つの「〇〇流」といえるわけです。

ですから「聖人一流」というのは、「親鸞聖人がお示しくされたみ教え」といった意味あいでございます。

#### 御勸化(ごかんけ)

「勸」というのは、「すすめる」といういみです。何をすすめるのかと申しますと、他力念仏のみ教えであります。「化」というのは、教化(きょうけ)のこととあります。「ご勸化」というのは、他力念仏のみ教えをすすめて、念仏の人となるようにみ教えをお伝えするということとあります。

#### おもむき

旨趣のことです。親鸞聖人のみ教えの内容と理解すればよいでしょう。

#### 大意

親鸞聖人がお示し下された、他力念仏の御法義の内容は以下の通りであります。

## 【36】の本文

信心をもつて本とせられ候ふ。

### ことばの説明

#### 信心（しんじん）

信心とは、浄土真宗の御法義の中でも最も誤解されやすい言葉のひとつであります。この「信心」とはもちろん他力のご信心であり、自力の信心ではありません。自力の信心とは、あることがらを正しいと思つて信じることであります。他力のご信心はどう違うのでしょうか。

まず、お名号とは、あらゆる衆生を平等にすくいとするはたらきです。お名号はあらゆる衆生をお念仏申させて、往生成仏せしむるはたらきを持つわけです。わけへだてなく平等にすくいとするはたらきに預かるには、「お念仏申してお浄土に参つておくれ」という阿弥陀様の仰せをそのまま聞くのです。そのまま聞いているとき、お名号のおすくいに預かるわけです。そしてお名号がわたしの上ではたらいているすがたを「ご信心」というわけです。私の上ではたらいているお名号が、わたしの口から出てきたとき、称名念仏となるわけです。ですから、「お名号」「他力のご信心」「称名念仏」はひとつのものです。

#### 本（ほん）とせられ候ふ。

本とは根本ということです。浄土真宗の御法義では、阿弥陀様のお救いにあずかれるかどうかは、他力のご信心をいただいたか

どうかのみにかかっているのです。

### 大意

他力のご信心のみが、往生成仏のたねである。

### 内容と味わい

「信心」の項目でご説明いたしましたように、阿弥陀様の仰せをそのまま聞きうけていることが、そのままご信心であるのです。ですから、ご信心のみが因であるとは言いかねれば、阿弥陀様の仰せをそのままお聞きすることのみが因であるといえます。そのため、浄土真宗では聞法が大切なのであります。

ご信心のみが往生成仏の因であることを信心正因（しんじんしょういん）といいます。ご信心が正しく往生成仏の因である、という意味です。ここで「因」というのは、往生成仏のきつかけというようなものではありません。仏因円満と申しまして、仏様になるために必要なものすべてが満たされるという意味です。ですから、往生と成仏が同時におこるのであります。

また他力のご信心はお名号のはたらいているすがたですから、人の能力に左右されません。そのゆえに平等に救われるのです。



## 【37】の本文

そのゆゑは、

大意

ご信心が往生成仏の正しく因である理由は、という意味です。

## 【38】の本文

もろもろの雑行をなげすてて、

ことばの説明

もろもろの雑行（ぞうぎょう）

親鸞聖人は、お浄土参りの方法を様々に分類されまして、そのことを御著作『教行信証』にお示しく下さいました。お浄土参りのためのおこないを、まとめて「行（ぎょう）」といいます。この行には他力と自力があります。

他力の行について

他力とは阿弥陀様のおはたらきです。いいかえればお名号のおはたらきであります。このおはたらきは、私どもに信ぜしめて、念仏を称えさせて、往生成仏せしめるはたらきです。称名念仏しているのは、ほかならぬ私なのですが、その称名とはお名号がわたしたしの上でおはたらきになっているすがたなのであります。「お名号のひとりばたらき」であります。

他力の行とは、私が往生のためにおこなう行ではありません。法蔵菩薩様は私に代わって御修行あそばされ阿弥陀仏となられました。そのすべてのお徳をお名号にこめて私めがけて届けてくださったものです。お名号が私の上でおはたらきになっているおすがたが、ご信心であります。お名号が私の口から出下さるのが称名念仏であります。ですから他力の行とは、阿弥陀様に行ぜしめられているといえます。私の入る隙間はまったくありません。他力の行は阿弥陀様の真実のはたらきそのものであります。

自力の行について

自力の行は、私のはたらきもって悟りを開こうとするおこないを指します。その特徴とは、

一つには、自分のはたらきをたのむところであること。つまり自力心であること。無明煩惱でよごれています。

二つには、念仏だけでは往生成仏できないと考えて、さまざまな行をまぜること。もっぱら念仏するのではないこと。

このように真実以外のものがまざっているのを雑行というのです。他力念仏以外の行をすべてひっくるめて雑行というのです。

大意

あらゆる雑行（他力念仏以外の行）をなげすてて、

内容と味わい

雑行とは無明煩惱によって汚れているおこないであります。そのようなおこないでは真実のお悟りの世界であるお浄土へは往

生できません。また、お浄土は阿弥陀様の願が、すがたとなったものですから、阿弥陀様の願になつた行いでしか往生できないのは明白であります。願になつた行いとは「他力念仏」であります。ですから、それ以外の雑行をなげすてるのです。

### 【39】の本文

一心に弥陀に帰命すれば、

ことばの説明

一心（いっしん）

一心とは『阿弥陀経』に出てまいりました。『阿弥陀経』の仏様のご本意では「他力のご信心」であると申しました。「一心」が他力のご信心である理由は、親鸞聖人が御著書『教行信証』の「信文類（しんもんるい）」の中でお示しく下さいました。

その中で、「一心」がご信心であることを最初に明かして下さいましたのが七祖のお一人天親菩薩様であることが述べられています。有名なお言葉ですので、次に掲げてみます。

天親菩薩様の『浄土論』の中の一節であります。右が原文、左が読み方であります。

世尊我一心

世尊、我一心に

帰命尽十方 無礙光如来

尽十方無礙光如来に帰命したてまつりて、

願生安楽国

安楽国に生ぜんと願ず。

お釈迦様、私は一心に尽十方無礙光如来に帰命したてまつりて、お浄土に往生したいと願います、という意味です。このご文の「一心」が他力のご信心であるというのであります。またここにある「帰命尽十方無礙光如来」が十字名号のもとであります。

補足しておきますと、この一心は第十八願の至心信楽欲生の信楽と同じものであるということです。

大意

阿弥陀様の仰せをうたがいなく聞きうければ、の意味です。

内容と味わい

一心の説明のところで天親菩薩様の御著書が出てまいりました。天親菩薩様はその業績の巨大さゆえに、実は同じ名前の人が二人いたのではないかと疑われたほどのお方です。天親菩薩様が著された『浄土論』という小冊子ほどの御書物の研究に曇鸞大師は生涯をかけられました。そのようなお方が、「わたくしは阿弥陀様のおおせを疑いなく聞きうけ、お浄土へ往生したいと願います」と真情を吐露されておられるのです。自力修行のいかに困難なことが、このお言葉からも察せられます。

## 【40】の本文

不可思議の願力として、

### 言葉の説明

不可思議（ふかしぎ）

不可思議とは、はかりしれないことです。私共では、考えも及ばぬということです。

願力（がんだりき）

願とは、『大無量寿経』に誓われてある四十八の誓願のことであります。法蔵菩薩様は四十八の願をおたてになられて、御修行の末に完成されました。その誓願の一つ一つは、「このようにならなければ、わたしは仏とはならぬ」という形式であります。この誓願が成就されたのですから、「このようになる」のです。ですから願が成就したということは、はたらきが完成したということです。そのはたらきを願力ということです。またそのはたらきは第十八願（これを本願といいます）にまとめられますから、本願力ともいいます。ここでは一切衆生を平等にすくうという本願力のことです。

### 大意

私共ではおもうこともできない、阿弥陀様の一切衆生を平等にすくうという本願力のはたらきによって、という意味です。

### 内容と味わい

本願力の説明で、四十八願は第十八願にまとめられるともうしました。この機会に第十八願をご紹介させていただきます。第十八願とは次のような願であります。

第十八願（至心信樂の願）

お経文

読み方

設我得仏、

設ひ我仏を得たらんに、

十方衆生、

十方の衆生、

至心信樂欲生我国、

至心信樂してわが国に生ぜんと欲ひて、

乃至十念、

乃至十念せん。

若不生者、不取正覚。

もし生ぜずは、正覚を取らじ。

唯除五逆誹謗正法。

ただ五逆と誹謗正法とをば除く。

設我得仏（せつがとくぶつ）

もし私が仏になるとして、という意味です。

十方衆生（じつぼうしゅじょう）

あらゆる衆生といういみです。

至心信樂欲生我國（ししんしんぎようよくししようがこく）

至心・信樂・欲生を、三つのところ三心といいます。くわしい説明は省かせていただきますが、この三つの心は真ん中の信樂におさまるのです。そしてその信樂とは、他力のご信心のことでもあります。また前号の説明に出てまいりました「一心」のことなのです。我国とは阿弥陀様からみてのお言葉ですから、お浄土を指します。したがってここの意味は、「私（阿弥陀仏）の言葉を疑いなく聞きうけてお浄土に往生したいとねがって」という意味になります。

乃至十念（ないしじゅうねん）

乃至とは回数を限らないという意味です。十念とは十声のお念仏のことです。あわせてみてみますと、乃至十念とは十声の念仏に限らないということですから、回数の決まった行いではないということです。つまり往生するのにならざる必要な行いではないのです。阿弥陀様のおおせを疑いなくお聞きした瞬間に、往生成仏が定まるからであり、それは54頁で説明いたしましたように、信心正因であるからです。ただ、いのちながらえた時には、お念仏申させて往生成仏させようという阿弥陀様のおおせなのです。称名念仏は撰取不捨されているあらわれであります。

若不生者、不取正覚。（にやくふしょうじゃふしゅじょうがく）

若不生者の「生」とはお浄土に往生することです。正覚とは阿弥陀様のお悟りのことです。あわせてみますと、もしお浄土に往生しないようなら、わたしは阿弥陀仏とはならぬという意味になります。

唯除五逆誹謗正法（ゆいじよごぎやくひほうししようぼう）

唯除とは「ただのぞく」という意味です。その対象は五逆罪と正法を誹謗する罪です。

五逆罪とは「父を殺す」「母を殺す」「阿羅漢を殺す」「仏の体を傷つけて血を流させる」「仏教教団をこわすこと」の五つであり、無間地獄に墮ちるものです。正法とは仏法であります。正法を誹謗するとは「仏なし」「仏の法なし」「菩薩なし」「菩薩の法なし」また以上のことを自分で思ったり、人から言われて思ったりすることであり、最も重い罪であります。

「唯除（ただのぞく）」のことで表現される仏様のみこころについては、親鸞聖人は御著書『尊号真像銘文』（注釈版聖典644頁）の中でお示しく下さいました。これは救いから排除するための「のぞく」ではないのです。これはあまりにも重い罪であるから、おしとどめるためのおことばなのです。そして五逆誹謗正法の者も、他力念仏の人に育てて救いとるという阿弥陀様のお慈悲の表現であります。

## 【41】の本文

仏のかたより往生は治定せしめたまふ。

### 大意

阿弥陀様のほうから、わたしの浄土往生は決定してくださいと  
いう意味です。

### 内容と味わい

『観無量寿経』に、他力のご信心を頂いたもののすがたを説かれた一節がございます。そのお経文を次に掲げます。

「念仏衆生(ねんぶつしじゅじょう) 撰取不捨(せつしじゅふしや)」  
というものでございます。これは「念仏の衆生を撰取して捨てた  
まはず」とお読みいたします。他力念仏の人は、お浄土に往生す  
るまで阿弥陀様にしつかりと抱かれて、絶対に見放されることは  
ないという意味です。このために、他力のご信心をいただいたも  
のは、往生成仏が定まるのです。これはひとえに阿弥陀様の本願  
力のおはたらきでありますから、浄土往生は阿弥陀様のほうで決  
定してくださいといわれるのです。

## 【42】の本文

その位を「一念發起入正定之聚」とも釈し、

### ことばの説明

#### 一念發起(いちねんぽつき)

ご信心をいただいたそのとき。阿弥陀様の仰せをそのまま聞き  
うけている時が、そのまま信であります。そのご信心をいただい  
た瞬間を「信の一念」といいます。その一念の時という意味です。

#### 位(くらい)

位とは、仏教における修行の段階をさします。詳しい説明は省  
略させていただきます。諸説ございますが、全部で五十二段階あ  
るといわれます。最高位の五十二段階目を妙覚(みょうがく)と  
申しまして、仏様の位であります。五十一段階目を等覚(とうが  
く)と申します。等覚とは仏様のお悟りとほとんど同じという意  
味であります。

浄土真宗では、仏様の一つ手前の等覚の位が重要な意味をもち  
ます。不退の位とはこの等覚のみを指すのが浄土真宗の御法義で  
あります。

#### 正定之聚(しじょうじょうしじゅ)

正しく往生成仏することに定まった仲間という意味です。仏教  
では諸説ありますが、浄土真宗では先にご説明いたしました等覚  
の位のことです。正定聚も等覚も不退の位も浄土真宗ではおなじ  
位を指しますが、重要なのはご信心いただいたその時、正定聚の  
位につくということ。そして遠い未来に仏様にならせていた  
ただくのではなく、今の生がおわった次の生でお悟りを開かせてい  
ただくのです。

補足しておきますと、等覚の位で有名なお方は弥勒菩薩様であります。弥勒菩薩様は次の生で、この娑婆世界にお生まれになつて仏様とされるのです。他力念仏の人は次の生で成仏するといふ点で弥勒菩薩様と等しい身の上であるといわれまして、親鸞聖人は大変ありがたいただかれました。

ただし誤解のないように申し添えておきますが、弥勒菩薩様は仏様の一步手前まで御修行が完成された尊いお方であります。私はどこまでも迷いの身であります。おなじ身の上と申しますのは、次の生で仏とならせていただくという、その一点がおなじであるということでありませぬ。

## 大意

その位を「一念発起入正定聚（ご信心をいただいたその時、現生正定聚の位に入る）」ともいい、という意味です。

## 内容と味わい

他力念仏の人は、阿弥陀様の「攝取不捨」のおはたらきによつて、現生正定聚の位につかせていただくのであります。

親鸞聖人は『浄土和讃』の第五十九首目に

**眞実信心うるひとは すなはち定聚のかずにいる**

**不退のくらゐにいりぬれば かならず滅度にいたらしむ**

とうたわれておられます。大意は次のようです。

「他力のご信心（眞実信心）をいただいた人は、現生正定聚（定聚）になつて、不退転の位につかせていただくのであるから、かならずお悟り（滅度）を開かせていただくのである」

このおはたらきは大変に尊く有難いおはたらきであります。あらゆる命あるものを決して見捨てはしない阿弥陀様の御慈悲であります。ここのとこころを、善導大師様は御著書『観経疏』の中で二河白道の譬えという有名なたとえ話によつてご説明されました。話の内容は今回は省略させていただきますが、その話のなかで、細い白道をいくしかない絶体絶命の旅人に阿弥陀様が呼びかける声がでてまいります。（注釈版七祖篇 467頁）

**「なんぢ一心正念にしてただちに來れ。われよくなんぢを護らん。すべて水火の難に墮することを畏れざれ」**

というものです。

私共は、あれこれごさしく分別せずに、ただ阿弥陀様の仰せのままにお念仏申すこととあります。阿弥陀様は、私共を見捨てることが絶対ありません。『観無量寿経』に説かれてありますから、間違いありません。

まだあれこれ考えている人には次のようなお言葉もあります。覚如上人（第三代目の宗主でございます）の御著書『執持鈔（しゅうじしょう）』（注釈版聖典 860頁）のご文です。

**「往生ほどの一大事、凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如来にまかせたてまつるべし。」**

### 【43】の本文

そのうへの称名念仏は、

ことばの説明

そのうへの

ご信心をいただいたうへの、という意味です。

称名念仏（しょうみょうねんぶつ）

ここでいう称名念仏は、自力の念仏をさすものではありません。お名号が私の上ではたらいっているすがたが「ご信心」であり、私の口から出たところが「称名念仏」であることは、すでにご説明いたしました。お名号「南無阿弥陀仏」と他力のご信心と称名念仏の三つは一つものなのです。お名号が場面に応じてあらわれているおすがたであります。

称名念仏のことを、「聞きもののお念仏」と申すことがございます。お念仏は阿弥陀様の全てのお徳が込められています。ですからお念仏申して、お念仏を聞かせていただくことは、阿弥陀様のおおせを聞かせていただいていることと同じです。お念仏申して、お念仏をそのまま聞かせていただいているその一瞬を、ご信心をいただいている「信の一念」といただけるわけであります。このことからもお念仏申す姿のいかに尊いことかがおわかりいただけます。

大意

ご信心をいただいたうへの称名念仏は、という意味です。

### 【44】の本文

本文

如来わが往生を定めたまひし御恩報尽の念仏とこころうべきなり。

ことばの説明

如来わが往生を定めたまひし

如来様（阿弥陀様）が私の往生成仏を決定してくださったこと、という意味です。

御恩報尽の念仏（ごおんほうじんのねんぶつ）

阿弥陀様が、私の往生成仏を決定してくださったことに感謝する意味合いの念仏、という意味です。

内容と味わい

ここで注意すべきは、「阿弥陀様の御恩に報いる念仏」あるいは「御恩に感謝する念仏」という言葉であります。

称名念仏の本質は、お名号であると申しました。それは阿弥陀様の全てのお徳がこめられているのであります。そのお念仏を自分の手柄として称えるのが自力念仏であります。同じように考えれば、お念仏を感謝の手段として称えることは、お念仏を私物化

する自力の念仏以外のなものでもありません。阿弥陀様のお徳に、私共から意味付けするのは傲慢というものです。往生成仏がすでに決定しているのですから、私に用事はありません。その御恩に感謝するばかりです。ただお念仏させていただくところに、自ずから報恩の意味合いが伺えるのです。ですから「こころう」とお示しなのであります。

ではなぜ御恩に感謝する意味合いが伺えるかと申しますと、私共がお念仏することによって、世にお念仏が響き渡り、阿弥陀様のお仕事の手伝いをさせていただいているのではなからうかという意味です。

## 【45】の本文

あなかしこ、あなかしこ。

### ことばの説明

あなかしこあなかしこ

小山法城和上の『御文章要義（上巻）』の解説から要約させていただきますと、仏様の法を敬い、すべての念仏者に礼をつくすことばであります。つつしんで申しあげるという意味です。

以上で『御文章』聖人一流章の御紹介を終了いたしました。

最後に再び全体のご文を掲げまして、大意を述べたいと存じます。

### 聖人一流章

聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもつて本とせられ候ふ。

そのゆゑは、もろもろの雑行をなげすてて、一心に弥陀に帰命すれば、

不可思議の願力として、

仏のかたより往生は治定せしめたまふ。

その位を「一念発起入正定之聚」とも釈し、

そのうへの称名念仏は、

如来わが往生を定めたまひし御恩報尽の念仏とこころうべきなり。

あなかしこ、あなかしこ。

### 大意

親鸞聖人がおすすめくださった他力念仏の御法義は、

如来様からたまわったご信心が往生成仏の正しく因なのです。

その理由は、あらゆる自力の行をなげすて、

ふたごころなく阿弥陀仏の仰せを聞きうけるとき、

私共にはおもいはかることもできぬ本願力によって

阿弥陀様が私共の往生成仏を決定してくださるのです。

そのようなすがたを「一念発起入正定之聚」ともいい、

ご信心をいただいたうへの称名念仏は、

阿弥陀様が往生成仏を決定してくださった御恩への感謝のほかありません。

つつしんで申し上げました。